

## 闡光録

### 一、善逝

人間が自分の歩んできた過去をふりかえって見るのに二つの相がある。老人は自分の過去を語って自分に価値づけようとする。そして、それは現在の自分が、すでになんらの進展を持っていない場合である。

若人は必ず未来を語り、将来を夢見ている。美しい幻影を追うことは、将来を持つ若人の特権である。

だが、老人の心とは別に、過去の足跡を凝視することは大切なことである。静かに過去をふりかえると、慙愧に堪えない足どりではあった。織られてきた一筋の織物は、ただ煩惱の絵巻物にすぎない。

だが、念仏の中に自分の過去を思うとき、油然として感謝が湧いてくる。如来あるがゆえに歩みえた過去であった。すべては南無阿弥陀仏に融かされてゆく。龍樹の『大智度論』を拝読していると、歓喜について仏は、

「布施人、歓喜を得るを説かず、また多聞、持戒、忍辱、精進、禅定、智慧の人、歓喜を得ると説かず。独り信の人に説く。」

と言う。真実のよろこびは信の中にのみあるとの仏意である。信の腹が、過去、現在、未来の三世を浄化する。

出世らしいものを得る機会もあった。分相應の地位も得られたかもしれない。しかし私は、今の私に満足しきっている。もし万一恩給でももらって、そろそろ楽隠居でもする自分になっていはいはしなかったかと思えば、身の毛さえよだつほど戦慄を感じる。苦しみも相当にあったが、みな私より大きいことはなかった。苦しんできたことが、今日、みな役立っている。

A教授にお会いしても、B教授にお会いしても、みなすすくとこのびた大木だ。そんな方にお会いすると、ねじれてねじれて、節くれだった私が悲しまれる。なんという素純さのない私だろう。それとともに、一生涯解いてあげようもない苦惱の中に縛られている多くの同胞のことを思わずにはいられない。

一代「信をとれ」とすすめられたのが、蓮如様であった。龍樹大師もまた信をすすめた人である。「人がもし手があつて宝の山に入れば、自在に宝をとることができる。信は手である。信がなければ、宝の山に入って手が無いのと同じである。」と龍樹は

言っている。「仏法の大海には信をもつて能入となす」とは大士の有名な断言であった。人生を真に悩み、やがて真に人生を飲んだ人の言葉である。

深い海に大きな宝があるように、深い苦悩の中には、そこでしかあり得ない宝がある。ほしいのは大信の手である。大信を獲得することが人生を解き、人生を感謝し、人生にふれることのすべてである。

自分を偽ることは、人生を偽ることであり、如来を偽ることである。自己を凝視すると、一切を偽ろうとする心がある。だがその心の悪魔を凝視して、けっしてその心に従ってばならない。一時の成功や、賑やかさを求めて、自己を偽れば、万古の寂寥が待っている。

人はみな上手になろうとし、上手に渡れとすすめ、上手に渡ろうとする。しかし真実に、深く渡れとはすすめないし、また真実に、深く渡ろうともしない。

浅い人は上手になる。しかし、浅くて上手なことが、早く世の中から棄てられる最良の方法である。上手になろうとするな、深くて、真実な生き方を求めよ。

私は私の魂に言つて聞かせる。  
仏様のことを、善逝という。「善く逝く」ことである。仏のご足跡の美しいことである。象のごとき大善の行歩の美しいことである。

金子大栄師は「観音の足跡には美しい華が咲く」と言われた。聖徳太子からこのかた、日本仏法の巨聖たちは、みな観音の足跡に咲いた聖い華であったのだ。

師はまた「ほんとの善知識は、勢至たる法然上人である。親鸞聖人は、善知識でなくて、それを受け入れて生きた方である。」と言われる。聖人もまた、観音の流れに咲いた華である。

ほんとうの人格は、野にあるのだ。人間の生きる野にあるのだ。装われた高い殿堂や、美しい象牙の塔の中にはあり得ない。聖人は荒野に咲いた華である。  
正法の華咲く荒野を思う。

私は、金満家に遠ざけられる。どこへ行つても、貧しい人たちがいちばん待つてくれる。このたび、本部だつて、貧しい人たちの血の結晶によつて生まれたのだ。

素裸な真実は、貧しい人たちの間にだけ拜まれる。念仏の真華は荒野に咲く。言葉は野卑であっても、厳しい二重三重の扉がなく、二頭の猛犬が裏口に待つてはいない。

観音の聖き血よ、この人たちを恵みたまえ。

時に固まりかける自分を打くだいて、自己本然の相にかえらなくてはならない。自己本然の相にかえるとは過去の清算であり、現在の充実であり、将来への飛躍である。

しかして自己本然の相とは、仏凡一体の境地であり、真実自己の発見である。自己の真実なる相を忘れてただ単に、学問や、事業や、財産に頭をつっこむことは、人間の墮落である。

人間の悩みを悩み、人間の苦しみを苦しみ、しかもその中に高い理想を受け入れるところに、ほんとうの人間生活があり、人格がある。

釈尊は、学者ではない。物知りではない。ただ偉大なる人格であったのだ。完全人、真人、これを仏陀というのだ。大地の上に美しい足跡を残して歩まれた人であった。人間の一切を知りつくして。

聖曇鸞も学問をすてて人間に帰り、道綽も善導も人間に帰り、源信、法然両聖はもちろんのこと、親鸞聖人に至っては、全く大地の上に人間の血に生き、人間の呼吸を呼吸して、万人を御同朋御同行と抱かれたのだ。

人間の上のみ如来の血は流れる。

軽業師の夫婦者があつた。一本橋まで行くと、女房がどうしても渡らない。そこで早速、軽業の衣裳を出して着せて扇子を持たすと、易々と渡つたという。

3

美しい法衣をつけて高座に上らせば渡り得ても、それを素裸の人間にした時、人生を彼岸へと渡り得る宗教家が幾人あろう。

しかして祖聖は素裸な人間であつたのだ。人格であつたのだ。

今日もまた雪が降る。私は生れつき雪の日が好きである。

雪を見れば、幼き日を憶い、聖人をしのぶ。北越の雪の中に、人間を凝視した念仏の祖聖、愚禿と諦観して、法蔵願心の地下水に沈潜した聖人を念ずる。

しかもかかる冷寒の底にも、功利的な祈願請求を持ち得ないで、あるがままを受取つて生きられた聖人であつた。

校長になれば校長になり、検事になれば検事になり、金満家になれば金満家になる。かくして人間が失われた時、人は墮落の極に至つたのだ。

感謝の言葉を、地位につけ、財産につけ、家柄につける。だが、善と悪、賢と愚、高と下、貴と賤、富と貧……それら第一と第二の世界を越えて、第三の天地にのみ、ほんとうの人間の世界がある。

聖人の信はこの第三の世界に打ちたてられてあつた。

悪にいて悪におらず、善にいて善におらず、貧にいて貧におらず、富貴にいて富貴におらず、真実の悲嘆も、真実のよろこびも、第三の世界にあった。われらの集いは第一、第二の世界を持ち込むことを許されない。

達磨の一喝「無功德！」

無功德底に至つて、善もとどこおらず、悪もとどこおらない。

無功德底に至つて、はじめて菜葉一枚粗末にすべからず。

寒月、冲天に輝いて梅花を照らす。梅花、霜雪の中におうて人を待たず。

無相の自然、梅花と月と霜雪の中に体露堂々。

何すれぞ人間の技巧末梢の装い、偽装成つて笑い、虚飾失われて泣く。

全的否定の大行鉄槌下つて第三世界の打開されるどころ、法爾自然の月、常住の光に輝く。

「善知識、もとの阿弥陀の命へ帰せよと教ふるを聞いて、帰命無量寿覚しつれば、わが命無量寿なりと信ずるなり。」

生きることの尊いかな。

如来のみ、善逝にてまします。